

交付第1号に 作家・玉岡さん

エッセー「丹波逍遙」

丹波市ふるさと住民票

丹波市のエッセーパンフレット「丹波逍遙」を書いた作家の玉岡さんがあるが、丹波市が新設した「ふるさと住民登録制度」の交付第1号となった。今日21日、谷口進一市長から「ふるさと住民票」が交付された。

ふるさと住民に「ふるさと住民票」の案内が届けられる。同日、三木市出身で加古川市在住の作家、玉岡さんがあるが、谷口進一市長から「ふるさと住民票」を受け取った。玉岡さんは「丹波市は日本の故郷の原型。住民票をいただき、ますます絆が深まった」と話していた。



ふるさと住民には観光パンフレットやクーポン券、施設の入館料免除などの特典がある。21日現在、県外110人を含む4,97歳の2,773人が登録している。



谷口進一市長（右）から「ふるさと住民票」の交付を受ける玉岡さんがある。丹波市提供

9.27
丹波新聞

ら、同市出身者やゆかりのある人など市外在住者とのつながりを深めるため新設。市施設の入館料の免除や広報紙や観光パンフレットの送付、クーポン券の発行などの特典がある。21日現在、県外110人を含む4,97歳の2,773人が登録している。

玉岡さんは三木市出身。丹波市の依頼を受けエッセーパンフレット「丹波逍遙」(A4判、65頁)を手がけた縁で登録。来年には、丹波逍遙に登場する歴史上の人物4人を題材にした玉岡さん原案の能力が発表されるとい

物姿で交付式に臨んだ玉岡さんは「第1号は光栄。丹波市は日本人が持っている『ふるさと』の原風景そのものに重なる町で『ふるさと』そのものがある町だと感じる。都会の人にも来てもらって『ふるさと』の良さを感じてほしい」と語った。

【丸井康充】

9.27
毎日新聞

平日夜間診察室 今年度で終了へ

丹波市

丹波市が柏原赤十字病院で実施している「平日夜間応急診察室」が、今年度末で終了する。昨年度に診察した患者数は1日平均1人に満たなかったといい、救急患者については丹波地域で輪番制度が確立していることから、市は、終了後も市民生活に大きな影響はないとしている。

同診察室は、入院患者に対応する県立柏原病院スタッフの負担軽減などのため2007年5月から実施。ピーク時の09年度は1日平均1.92人が利用した。

その後、幼い子どもがいる母親らでつくる「県立柏原病院の小児科を守る会」が、かかりつけ医を持ち、安易な受診を控えてもらうという作成した冊子の普及などで患者数は減少。昨年度は1日平均0.92人に。約9割は翌日受診でも対応でき、入院に至るケースはほとんどなかった。

市は今年度、診察室の医師の賃金や医師会への協力金など計約1130万円の予算を組んだが、これを見直し、医師会の要望も受け、終了を決めたという。